

## 仏様のおはなし新シリーズ第65集 その2 「人間の悲しさ」

お釈迦様在世の頃のお話です。

コーサラ国のプラセーナチット王は美しい妻であるマツリカー王妃を伴って、月を見るために王宮の高い場所に登った。その時、空に美しく輝く月に感動した王は、王妃に対し「あなたがこの世で最もいとおしく思うものは誰か」と尋ねた。しかし、ロマンチックな答えを期待していた王の思いとは反する答えが返ってきた。「王さま、私が最もいとおしく思うものは私自身です。」すっかり興ざめしてしまった王さまに向かつて、王妃は問い返した。「では王さま、あなたがこの世でもっともいとおしく思われる方はどなたですか。」しばらく考えた結果、王もまた王妃と同じように答えざるを得なかった。王妃のことをもっともいとおしく思い、愛し合っていると思っていた王だが、はじめて互いの思いのなかに横たわる、自己への抜きがたい愛着、我執があることに気づき、深く悩んだ。王はただちにお釈迦様を訪ね、この悩みを打ち明けると、お釈迦様は次のように答えた。「自己の心を真に知るものこそ、他の人を愛することのできる人である。自分を誰よりも愛する心を捨て去ることのできない自己、その自己にめざめてはじめて互いに他のものごとをおしく思うことができる。」このお釈迦様のことはから、王は王妃の真心を知り、王妃が自分を愛する心の深さを知った。

これは原始仏典に出てくるエピソードです。私をはじめでこのお話しを聞いたとき、はっとしたことを覚えていますが、皆さんはいかがでしょうか。ここには「愛」ということ、そして人間の持つ悲しさが語られているように感じます。

自らのなかにある自己への愛着、我執、これを自分のこととして受け入れることは容易ではありません。けれども、私の抱えているもの、その悲しみの深さが、そのまま阿弥陀様の「私」への慈悲の深さだと聞きひらくとき、はじめて自らの姿にうなづけます。そこに慚愧、はずかしいという思いもいただくのですね。

自己の持つ悲しみに気づく、このことが人生を見る目を開き、私自身の生きる指針となるのでしょう。今回のエピソードは引き続き、私達に大切な事を気づかせてくれそうです。

この度は地行伝照寺の轟勇二が担当させていただきました。有り難うございました。

